

令和6年度

鹿児島県の教育

1月号



巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事長
鹿屋市立寿北小学校長
伊藤 太
県連合校長協会小学校長部会副部長

「気づき・考え・実行する」

子供の育成を目指して

本校の校長室をはじめ各教室や廊下に、アンリー・デュナンの肖像画と「わたくしは青少年赤十字の一員として、心身を強健にし……」から始まる「ちかい」が掲示してある。アンリー・デュナンは、ご承知のとおり、一八五九年のイタリア統一戦争で救助活動を行い、その後、著書「ソルフェリーノの思い出」の中で、国際的救護団体の創設の必要性を訴え、赤十字の設立に大きな功績を残した人物である。また、第一回ノーベル平和賞も受賞している。

青少年赤十字は、青少年が人道の赤十字精神に基づいて、世界の平和と人類の福祉に貢献できるように、青少年一人一人が日常生活の中で望ましい人格と精神を自ら形成することを目的とした活動である。「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」の実践目標のもと、日常生活の心構えとして、自ら「気づき・考え・実行する」という態度目標を掲げており、鹿屋市では、全ての小中学校が、加盟校として登録し、日々の教育活動の中で実践を行っている。

令和三年に出された中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」では、学習指導要領の着実な実施やICTの活用を通して、一人一人の児童生徒が自分の

よさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要であると述べられている。

本校では、「気づき・考え・実行する」子供の育成」をテーマとして掲げ、主に特別活動の実践を通じた校内研修に取り組んでいる。子供たちが、様々な生活の場面において、自らが現状や課題に気づき、今すべきことや望ましい言動について考え、意見交換や合意形成の過程を経て、実際の行動に移すことができる資質や能力を育てていくことは、令和の日本型学校教育の目指すところと一致するものであると考える。

急激な社会情勢の変化や世界各地で今なお続く紛争、感染症の流行、想定外の自然災害や気候変動など、予測困難なこれからの時代を生きていく子供たちに、大変分りやすい「気づき・考え・実行する」を根付かせていきたい。そうすることで、将来、子供たちは持続可能な社会の担い手としての役割を果たし、自分と共に生きる他者も含め、幸せな生活を営んでいくことができるのではないだろうか。

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		

令和7(2025)年1月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844



随想



「分析」してみませんか？

株式会社コスモテック 岩坪 順
取締役 南日本事業部長

少しだけ、所属する会社のコマーションをお話ししながらタイトルに近づければと思います。当社は、鹿児島県の種子島と内之浦に所在する宇宙センターにおいてロケット打上げに必要な施設設備の保全と打上げ運用を行っている会社です。現在は民間ロケット発射場にも関与を拡大し、事業を展開中です。

私が小学生の頃、種子島宇宙センターが産声を上げました。当時は小型の固体ロケットを打ち上げていました。私はロケットから噴き出す白い噴煙を遠くから眺めていたことを覚えています。

一九七七年に地元の高校を卒業し上京しました。様々な環境の中で学び生活する中で生ぬるい感覚では生きていけないことを痛感していた時に、Uターンすることとなり、現在の会社に仕事の糧を得ることになりました。あの頃の自分は、何かの止め時を決めたり、決断したりしなければならぬとき、一歩引いて「これまで時間とお金をかけてきたし」と何かしらの理由を付けて、花の都に留まろうとしていなかったらどうか？と、客観的に自問し続けています。現在に至るまでに、宇宙関係の仕事のおかげで様々な出会いがありました。そして、宇宙関係の仕事であるが故の様々な出来事につながりました。労働安全や労働衛生、職場環境の改善、働き方改革、労働人口減少対策、DX化対応など書き表せないほどの失敗や苦悩がありました。しかし、脅威や弱みを機会(チャンス)と捉え、

訂正を繰り返しつつ目の前に立ちふさがる壁を乗り越えてきました。ここでいう訂正とは、過去に遡ってみると違和感や矛盾がいろいろな場面で発生していたことに改めて気付かされ、その度ごとに過去の解釈と現在を結び付けるために試行錯誤を繰り返しながら一貫性を求めていく過程です。現実に合わせて過去と現在をつなげる「訂正する力、探求する力」が必要だと考えています。

探求の第一歩は、今の自分と過去の自分が繋がっている「思わしくない結びつき」つまり、なんとなく環境に順応していた状態を見つめ直し、別の結びつき(繋がり方)を見つけ出し、自分の才能に合った取り組み方を探すことが必要であり、そのためには「いくつになっても勉強が大事!」とこの頃強く思うのです。

会社に求められる「探求」は物事を振り返り問いかけ続け、「こだわりを見つけて、育てて」それらを捉えて「疑い、問いかけ続ける」ことで社員個々や所属グループにおいて実現されていない能力を導き出すことにあり、やはり学びが大事であり、分析力が必要となります。自身自身の「根底にあるこだわり」や「凝り固まった考え方」を見付けるためにも分析力は欠かせないツールです。そして、過去に得られた知識を分析することで面白いものが見えてくることでもあります。

例えば、環境です。昭和の時代であれば、ゴミが多く出ない、自然環境に優しい生活スタイル

略歴
一九八二年 株式会社コスモテック入社
一九九五年 海外射場視察(NASA全施設)
一九九七年 品質保証課 ISO9001、ISO14001認証取得
二〇一三年 事業部長代理
二〇一八年 現職

ルだったはずですが。しかし、今はゴミを大量に出すような生活スタイルになっています。現代人の「生活を改めるべきだ」というような展開を導き出すのが分析の始まりです。「なぜなんだろう」と問いかけ続ける癖をつけておくと分析も楽しいものになってきます。

では、昔の自分にその頃はどうかだったのかと問いかけたなら、「遊びに精一杯でそういうことを思ったこともなかった」という回答がくること間違いなしです。情報化の時代、自分自身が必要とする情報はほんの一握りでその他は多種多様な情報があふれています。まずは、思考を止めないこと。そして、会社を取り巻く状況を俯瞰できる能力を保ちつつ多種多様な情報に押しつぶされないようにと常に心掛けています。

会社を経営する中で数値予測は非常に大事で、算数(数学)を多用します。特に数値予測では方程式と微分方程式を多用します。そして、得られる情報を使い分けていますが、微分方程式で導かれる「関数」も活用しています。つまりダイナミックな情報が経営に不可欠なのです。過去の自分に数字は好きでしたか？と問いかけたら「見るのも嫌だった」と返されること間違いなしですね。

皆さんも、今までの行動や経験を振り返り、良かったことや今後も続けたいこと、うまくいかなかったことを区分して自分自身の「分析」をしてみてはどうでしょうか。



「心を高める教育」を考える

鷹巣中(北) 脇岡博史

はじめに

本校が所在する長島町は、県の最北部であり、東は八代海に面して出水・水俣を臨み、風光明媚な土地である。基幹産業は農業(ジャガイモ等)と水産業(ブリ養殖等)が盛んである。碧い海や緑の山など自然に恵まれた環境にあり、地域住民の教育に対する熱意も高く、学校の諸行事等においても大変協力的である。

少年の頃、鷹巣の海で思いっきり泳いだ思い出の地であり、不思議なご縁を感じる。保護者や地域の方々に温かく迎えられる。暮らしにすっかり慣れ親しんでいる。

二 将来を見据えて

昨年まで八年間、行政の仕事に携わった。学校では得られない、貴重な経験を積ませてもらった。学校教育に生かしていこうと、希望を膨らませて意気込んだが、情報教育の推進や、業務改善等目まぐるしい変化に想像以上に驚かされている。

令和六年二月に「鹿児島県教育振興基本計画」が策定された。基本目標は「夢や希望を実現しともに未来を創る鹿児島の人づくり」である。第四期を迎え、「ともに」という文言が追加されており、令和二十二年以降の社会を見据えている。現在の中学生が二十代後半〜三十代前半の年齢であり、それを考えると十数年後の予測困難な時代を生きていく上で、「人」を大切にすることはより重要だと

考える。

お互いが助け合い、支え合っていく教育(心を高める教育)において、自身の経験や教育観を含め、今を振り返る。

三 「心を高める教育」の実践

(一) 特色を生かした取組

生徒会活動の取組を一部紹介したい。立ち止まって挨拶の励行(語先後礼)や無言清掃、花育で活動等に積極的に取り組んでいる。校名にちなんだ「若鷹チャンピオンカップ」(学年対抗レクリエーション)や「一校一運動」若鷹タイム(体力づくり等)は、生徒会が企画運営し、交流を深め合う活動となっている。この前、活動の一環である学年対抗ドッジボール大会を見学した。総当たり戦で行われ、多少は遠慮や恥じらいがあり、物足りなさがあるのではと思いきや、どの学年も思いっきり投げ合う等、先輩に挑む後輩の姿を目にした。その光景を見て、後輩にとって三年生は凄いという尊敬の気持ちや、三年生は後輩に対して、潔さやいたわりといった思いや場面を感じ取れた。以前本校のよさが話題となった場面が思い出された。それは親や地域が、行事や社会活動に積極的に参加し、人付き合ひの大切さを教え合う教育になっていることだった。助け合う、支え合うという相互相譲の取組が繋がっていることを感じてならない。

(二) 本を読む

豊かな心の育成に向けて「読書の推進」を図っている。「本を読む」ことは、自己実現への可能性や夢をもつきっかけを広げてくれる身近な宝物だと思える。年度当初、図書室に本を寄贈し、本に親しむ環境を充実させ、全校朝会等では本の魅力を紹介している。

脳科学の視点から、紙に書かれた文章は五感が働くと言われる。書店や図書室へ行き、本が並ぶ景観や雰囲気を感じたり、手触り等で想像を働かせたりと五感に訴えて情報を理解するため、脳の活性化に繋がる。そして、しなやかな感性と柔軟な思考力が磨かれるなど「心を高める」には欠かせないと考える。

私は全く本を読む習慣がなかった。中学校の先生の影響で本を読むようになった。一冊の本との出会いは、知性や好奇心が高まり自己実現への原動力になるのではないかと。今後も、一冊の本に出会える環境づくりに、学校全体で取り組んでいきたい。

四

おわりに

昨年の夏、高校の同窓会が開かれ、教師になるきっかけと生き方に大きく影響を受けた恩師に久しぶりにお会いした。八十半ばというご高齢である。今でも私の原点はその教えにある。柔道の先生であった恩師からは、嘉納治五郎が唱えた「自他共栄」や「順道制勝」をはじめ、強くなる以前に「人」として大切なことをご指導いただいた。印象深い説論もいくつか蘇る。「一期一会」「環境が人をつくる」等々、高校生の心に強く突き刺さり、教職を続ける今でも役に立っている。

当時受けた愛情と尊敬の念は今も変わらない。この原点、そして、感謝と謙虚の思いを胸に、「人」を育てる仕事に渾身の力を振り絞っていききたい。



地方校における生徒募集と学校魅力化

与論高 大倉 秀 心

一 少子化の波

少子化による生徒募集の厳しさは、どの地方校にとっても喫緊の課題だと思う。域外の高校への進学もなかなか減らない。より大きな学校での高校生活に対する憧れや期待が中学生とその親にあるのかもしれない。そして、地方校はそれを上回る魅力を生み出すプレッシャーに悩まされることになる。

二 「ルーツ」・島の高校を卒業する意味

四月に赴任して以来、繰り返し「与論島にルーツをもつ自分に誇りをもて」と生徒に伝えてきた。先日も、ある島外の方から「与論島出身なんて、なりたくてもなれないんですよ。だから羨ましいんですよ。」と言われ、与論島で生まれ育つこと自体が、それだけで立派な個性であることを改めて実感した。与論島にルーツをもつことの貴重さ・有り難さを次のような趣旨で生徒には伝えている。

「ルーツ」とは、自分や祖先が生まれ育った土地に対する感情的な結びつき、心の拠り所みたいな感覚といってもいいでしょう。この単語のもともとの意味は植物の「根っこ」ですから、生徒の皆さんが本校を卒業した後、どこで生活することになっても、

「根っこ」は与論島にあるという意識を常にもつ大人に成長してほしいのです。他の地域とは明確に異なる自然や文化が色濃く残る、一島に一枚しかないこの与論高校でしか受けられない教育コンテンツをフルに活用して、「日本人」というよりはむしろ「与論人」としての自我を確立してほしい。都会より地方が、集団より個の力が問われる時代になっています。そういう意味では、与論高校の生徒には追い風が吹いている。小規模校であることを逆手にとり、大規模校の生徒が経験できない、与論島だからできること、与論島でしかできないことを前めりの姿勢で経験して、自分たちの存在価値を高めてほしい。本校は生徒個々がオンリーワンの存在になりやすい学校なのです。

三 地域における学校の存在意義

与論町は「島だちの教育」を理念として掲げ「島発ち」「島建ち」「島立ち」の三点を大切にしている。島を出発するまでに島を知り、島を建設・創造するための課題発見力や問題解決力を育み、どこの地でも自立できるための学びに向かう力・人間性を身に付けることを目指している。海そのもの

の学びを踏まえつつ、海に囲まれた与論島の文化や島で生きる人々に目を向けながら学ぶことを目的に小・中学校で始まったのが、与論町海洋教育「ゆんぬ学」である。この「ゆんぬ学」を高校の探究活動で更に深め完成させるため、本校では今年度から町の海洋教育推進協議会から学校コーディネーターに週二回常駐してもらい、生徒の探究活動のサポートをお願いしている。

また、中高一貫教育校の強みを一層強くするために、乗り入れ授業を実施していない教科を含め、全ての教員が日常的にお互いの学校を行き来し、学校間の情報共有を一層深めている。日頃お世話になっていている地域に対しては、あらゆるボランティア活動で生徒が恩返しをしている。また、地元企業への貢献の意味からも本校では生徒のアルバイトには特に制限を設けていない。

四 島の子は島で育てる

学生数減少に苦しむ地方大学の中で、地元企業との連携を深めることにより定員を確保している大学もあるように、高校においても、ただ上級学校に進学させるのではなく、長い目で見て地元へ貢献する意欲がある生徒を育成することが地方校のこれからのミッションになるのではないかと思う。地元の方々との親睦会などでは、与論高校は鹿児島県立ではあるが、意識の中では「与論島立与論高等学校」という島民みんなの高校という思いをもってもらい、島の子どもは本校から「島だち」させてほしいと訴えている。



夢実現に向けて

大口小(始伊) 垣内 秀一郎

一 はじめに

本校区は、県北西部に位置し、熊本県・宮崎県と接する伊佐・大口地区のほぼ中心部にあり、政治・経済・文化の中心地で交通の要衝でもある。また、平地の中央部を川内川の支流も流れ、おいしい伊佐米の生産地でもある。校区民の学校教育に寄せる関心は高い。今年度、創立百五十二年を迎える本校は、児童数四百十名、教職員数四十五名である。通常の学級十三学級・特別支援学級十学級のほかに三つの通級指導教室(言語通級二、LD・ADHD通級一)があり、他校からの通級生も受け入れており、特別支援教育において本市での本校の役割には大きいものがある。

二 学校経営の方針

学校教育目標を「夢実現に向けて、自他の心と体を大切にし、共に高め合い、自ら学び自ら考える子供を育てる」としている。人権尊重の精神を学校経営の基盤とし、子供の夢実現に向け、義務教育の小学校段階で、何自身に付けさせるのかを明らかにし、知・徳・体の調和のとれた子供の育成を目指している。

三 夢実現のために

学校では児童に学力、体力を付けさせ、心優しく成長できるように様々な教育活動に取り組んでいる。それらは、未来に生きる子供一人一人の夢実現のために行っていることだと常に振り返り、学校経営の柱としている。

(一) 応援される人に

子供たちが夢を実現するためには、目標に向けて一人一人が努力し続けることは当然必要であるが、一方で周りの人々からの応援や協力が大きな力となる。そのためには、日頃の生活の中で周囲との良い関係を築き、人から応援される存在になることも大切である。始業式や全校集会の校長講話の中で子供たちに繰り返し話していることがある。「元氣なあいさつ」「気持ちのよい返事」「物を大切にする」「感謝の気持ちを伝える」「当たり前前」の五つである。これらのことを積み重ねていくことで、子供たちは人から信頼され、応援される存在に育っていき、その応援が夢を実現するための大きな原動力となる

ると考えている。

(二) チームで向き合う教職員集団

子供たちの夢実現のサポートをするために教職員は組織で対応することが重要である。学力向上や生徒指導については、毎月、学校全体での共通実践事項の確認や児童への指導、支援の在り方について意見交流をしている。また、学校生活に困り感がある児童に対しては、児童支援加配教員や特別支援コーディネーターが中心となって学年部、専科や管理職、市職員も巻き込んで、それぞれの立場でできることを話し合っている。そして、その子にあったオーダーメイドの対応を模索している。さらに、保護者との面談を行う際には、複数で対応することにより、正確な情報共有ができたり、解決策の選択肢が広がったりして、教職員同士のサポートもしやすい環境をつくっている。児童も保護者も職員も独りにしないチームでの取組に努めている。

四 おわりに

本校は、創立百五十二年の伝統を礎に、児童一人一人の夢実現に向けた教育を全職員で支え、「あいさつ」「感謝」など日々の積み重ねを大切に、信頼され応援される子供たちの育成を目指している。また、組織的な支援を通じて、全ての児童が安心して学べる環境づくりを推進している。児童が未来へ羽ばたけるよう、今後も知・徳・体の調和を図りながら教育活動を行っていききたい。



創立百二十四年の歴史と伝統を

次の世代に継承する学校経営を目指して

川辺高 伊地知 健 三

一 はじめに

本校は明治三十三年（一九〇〇年）に開校した鹿児島県第四中学校を前身とする普通科高校である。「自律 端正 積極 公德」を校訓とし、創立百二十四年を迎える。これまでに二万一千名を超える卒業生を送り出してきた。NHK第十六代会長の川口幹夫氏も本校の卒業生である。現在は普通科のみ一学年二学級の小規模校である。

校舎敷地西側のグラウンドの奥にある丘陵「神戈陵」は、本校のシンボルであり、卒業生の心の拠り所である。同窓会も「神戈陵会」と称している。

二 本校の現状

現在在籍する生徒数は全校で百二十四名である。本年四月の入学生は定員八十名に対して三十三名であった。このことに生徒も危機感を抱き、地域が注目するトピックスを作り出し、情報発信しようと生徒会役員を中心に学校のPR活動に積極的に取り組んでいる。

三 本校の取組

(一) 地域行事への積極的な参加

川辺磨崖仏祭り、川辺祇園祭、川辺二日市など旧川辺町で行われる伝統行事のほか、知覧ねぶた祭り、枕崎きばらん海などの地域行事をはじめ、地元の保育園、病院ボランティアなどにも有志生徒が多数参加している。地域の方々からの信頼も厚い。

(二) 学校行事「神戈陵祭 文化祭・体育祭」

文化祭、体育祭は神戈陵祭文化祭、神戈陵祭体育祭と銘打って実施している。

文化祭は今年度から旧川辺町文化会館を会場に実施している。地元商工会の協力を得てキッチンカーやマルシェの出店で賑わいを創出した。また、体育祭では「川辺高校生の日」なる本校ならではの種目がある。「神戈陵杯争奪学年対抗リレー」がプログラムのトリを飾る。

(三) 学校行事「神戈陵塾」

OBを中心に講師を迎えて後輩にエールを送る講演会である。文化祭の前日に実施している。平成十二年から始まり今回で二

十五回目となる伝統行事の一つである。

(四) 学校行事「三十三km遠行」

毎年十月には明治三十三年開校にちなんで全校生徒で三十三kmを歩く遠行を実施している。

(五) 教室断熱化プロジェクト（令和五・六年度実施）

令和五年度にガバメントクラウドファンディングで資金を募って第一回を実施した。二回目となる今回は九月下旬に生徒会役員が実行委員を務め、二十九名の生徒有志が川辺高校活性化対策協議会ワーキンググループの方々の指導・協力のもと本館三階の普通教室の壁や天井に断熱材等を入れて改修工事を行った。

参考までに、昨年度改修した教室は改修前と比較すると室温が二〜五度ほど変化し、夏は涼しく、冬は暖かくなることが検証されている。

四 おわりに

南薩地区の児童・生徒数の大幅な減少とバスの減便等によって、内陸部に位置する本校は生徒募集に苦慮している。

本校で学ぶ生徒たちは素直で礼儀正しく地域からの信頼も厚い。この生徒たちの有りようこそ百二十四年の年月に培われた、社会に貢献する「人間性」を育む伝統であろうと考える。生徒数減の逆境を、川辺高校のよさを広く地域に理解してもらうチャンスと捉えて、これからも明るく元気で活力のある学校づくりに努力していきたい。



魅力ある学校づくりの推進と授業改善

可愛小(北) 大園 清子

一 はじめに

本校は、昭和二十六年四月に、亀山小学校から分立し、児童数六百八十五名、二十八学級の大規模校である。校区周辺には、新田神社や本校の名前の由来になった可愛山稜、国分寺跡の他、市立図書館や中央公民館、まごころ文学館や歴史資料館などの文教施設も多く、環境に恵まれている。

二 小中一貫教育と魅力ある学校づくり

薩摩川内市は、平成十八年三月、全国に先駆けて小中一貫教育特区に認定された。亀山小学校、育英小学校、川内北中学校と本校の四校で川内北中学校区小中一貫教育を進めている。令和四年度から、国立政策研究所と連携し、魅力ある学校づくり(令和五年度からは「こどもの発達を支える調査研究事業」に名称が変更)を進めている。令和四年十二月に改訂された生徒指導提要に基づき、系統性・連続性のある九年間の学びを進めている。

三 取組の実態

(一) 魅力ある学校づくりのアンケート結果
川内北中学校区では、「学校が楽しい」「み

んなで何かをするのが楽しい」「授業がよく分かる」「授業に主体的に取り組んでいる」の四観点を指標とし、学期ごとに調査を行っている。

昨年度末と今年度一学期末に実施したアンケート(三年生以上対象)で、最上位項目の「当てはまる」と回答した児童の割合は「学校が楽しい」(六十七%↓七十三・八%)「みんなで何かをするのは楽しい」(七十一%↓四十九・七%)「授業がよく分かる」(三十六%↓三十四・七%)「授業に主体的に取り組んでいる」(三十七%↓五十一%)であった。

(二) 授業改善に向けた取組

これまで「みんなで何かをするのは楽しい」という項目は、二学期以降に数値が伸びていた。運動会や修学旅行、宿泊学習、遠足などの学校行事や特別活動を通して子供たちが実感していたのではないかと思われる。しかし、学校生活の大半は授業である。その授業で教科として付けたい力は何かを指導者が明確にもった上で、子供たち

が「学び合う」「教え合う」等の活動を意図的に仕組むことが重要であると考えている。一方的に教えられるよりも「なぜ、どうして」という問いを元に自分で学んだり、友達と教え合ったりして「分かった、できた」と実感する方が自己肯定感の向上につながり、たとえ失敗したとしても、自分でやったという満足感につながりやすい。

また、学び方そのものを子供たちが選ぶ「自己決定の場」を授業に位置付けることで、主体的な学びを通して「授業がよく分かる」という項目の数値も自ずと上昇するものと期待している。

さらに、子供たちが自己の成長に気付くことができるように川内北中学校区小中一貫教育の共通実践として「分かったこと(分からなかったこと)・頑張ったこと・友達の良かったこと・もっと知りたいこと」を「わがとも」というキーワードで振り返る自己評価の時間の確保も意識させ、一時間ごとの頑張りを価値付けている。

四 おわりに

子供たちが輝くためには、学校や学級に子供たち一人一人の居場所があること、個性や多様性を認め合い、自分を受け入れてくれる仲間がいることが大きな鍵となる。

学校生活で最も多くの時間を割いている授業を発達支持的生徒指導の観点から改善を図っていくことで、今後も子供たちの笑顔がふれる学校を目指していきたい。



ふるさとで学び、ふるさとに学ぶ

喜界小(大) 晴 永 健

一 はじめに

本校は町の学校再編にともない旧五小(湾小・荒木小・上嘉鉄小・坂嶺小・滝川小)を再編し、平成二十四年度から新たに喜界小学校として開校し、今年度で十三年目を迎える学校である。

本校区は、二十四の集落からなっている。住宅街から少し離れると広陵としたサトウキビ畑が広がっている。海岸線も美しく、海の蒼さ、野原の緑、年間を通して様々な花が咲き乱れるなど南国特有の鮮やかさを醸し出している。このような豊かな自然の中で、子どもたちはのびのびと生活している。

二 本校の取組

本校では教育目標を「ふるさとに誇りをもち 夢に向かって粘り強くがんばる子ども」と掲げ、学力向上を中心に四つの重点事項を設定し教育活動を進めている。

その中でも「夢と希望をはぐくむ教育」「ふるさとを愛する心の育成」について喜界島によさ、地域の特徴を生かし、充実した学習になるように努めている。

三 取組の実際

(一) キャリア教育の充実

本校では一学期に「夢育て強調月間」を実施し、キャリア教育の充実に努めている。具体的には、毎年、講師を招聘し、講師自身の夢やキャリアについて語っていただく中で、児童一人一人が自分自身の将来に「夢を抱く」「目標を見つける」ことをねらいとしている。また、「夢育て授業」の実施や、「夢カード」の作成と発表も行っている。

(二) 地域素材を活用した「ふるさとを愛する心」の育成

生活科や総合的な学習の時間の中に「本物に触れる体験活動」を位置付け、地域の人材を積極的に活用しながら充実を図っている。具合的には、

- 一年生…牧場見学・昔の遊び体験
- 二年生…昔のおもちゃ作り
- 三年生…三味線や方言に親しもう
- 四年生…チョウ博士になろう

(アサギマダラのマーキング)

五年生…サンゴ博士になろう

…ごま栽培と喜界島の未来

六年生…サトウキビと喜界島の未来

…今の自分と未来の自分

などである。また、近年、町の喜界島ジオパーク構想を受け、喜界島サンゴ礁科学研究所と積極的に関わる中で、子どもたちはふるさと喜界島について理解を深めている。

また、五年生での宿泊学習や六年生での修学旅行においても、奄美大島本島での学習や体験活動を通して、奄美の自然や文化を学習し、喜界島との共通点や相違点について考察を深め、喜界島を改めて見つめ直す機会としている。

このように「ふるさとで学び、ふるさとを学び、ふるさとに学ぶ」中で子どもたちは、ふるさと喜界島によさを再発見し、自然・文化・産業への理解を深めている。

ひいては、そのことが、ふるさとに誇りをもつことや地域の方々への感謝や尊敬、さらには子どもたち自身の夢や目標につながるように今後も充実を図っていきたい。

四 おわりに

本校に赴任して七か月が過ぎようとしている。今朝も子どもたちの元気なあいさつが校庭に響き、ボランティア活動に取り組む子どもたちの汗が光っている。ふるさと喜界島で学ぶ子どもたち、これからも地域とともに、ふるさとに誇りを持ち、夢と希望を育む教育を推進していく。

心に残るひまわり



汽船も亦道なり

中之島学園(郡)新留 正和

「汽船も亦道なり」中之島出張所の側に建っている石碑に刻まれている言葉だ。この言葉は、中之島尋常小学校初代校長であり十島村村長も務めた文園彰校長先生の言葉である。村長時代にそれまで不定期の航路運航だった十島村の定期船就航に尽力された。十島村は日本最後の秘境と言われ、交通手段はフェリーが週二便のみ。人や物資を運ぶ唯一の移動手段だ。台風や低気圧で強風が吹いたり波が荒れたりすると船が欠航し、たちまち人の移動や物資が途絶える。台風の時節には、二週間船が来ないことも度々ある。学校行事が船の影響で変更になることもよ

くある。高校入試の時節は特に心配になる。普段から不便さを感じながらも徐々に島の生活に慣れてきた頃、文園先生の言葉を心底実感せざるを得ない事態が起こった。

令和五年十二月二十九日朝八時前、島内の防災無線で「フェリーとしま2」の火災事故を伝える一報が流れた。年末休業に入ったその日の船で上鹿予定の方も多くいて、十島村内に大きな衝撃が走った。それからしばらく、「船はいつ運航再開するのか。」「人や物資の運搬はどうなるのか。」など、先の見通しが立たず、不安な日々が続いた。これまで当たり前だと思っていた船の運航が突然途絶え、島からの移動もままならず、人々は閉塞感を感じていた。この緊急事態に、役場や関係の方々が村民のために奔走してくださり、旅客船や貨物船など様々な船が十島航路を走った。遠くは東京からも船がきてくれた。そのおかげで、十島の人々の命と生活を繋いでくれた。約三か月半後、フェリー運航が再開した時の喜びと安心感は忘れられない。

村民の「道」として、これからもフェリーが人や物だけでなく、十五で島立ちをする子どもたちの夢と希望も運んでほしいと願っている。

雑草の気持ち

鷹巢小(北)西留 敦朗

初任校での校長先生からの、「雑草の気持ち分かるか。」のひとことを、長年の教職生活の中でいつも思い出している。雑草の気持ちとは何だろう。肯定的に考えると、「踏まれても踏まれても起き上がる」や「どんな場面でも芽をつける」逞しい生き方になるが、否定的に考えると、「目立たない」や「嫌がられる」認めてもらえない生き方とも考えられる。

私は、日々の学校美化作業に努めている。軽快に草払い機で作業を行い、すっきりと刈られた情景を見ると嬉しいものである。多くの校長先生方も、毎日を環境美化に努めておられることと思う。また、たまに帰る自宅でも、小さい庭の草取りや剪定が待っている。草も根を土に絡ませているので簡単には抜けないが、すぽと抜けた瞬間の土の匂いと隠れていた虫を見付け、雑草の生命力に感心してしまう。作業する手を止め、「雑草の気持ち」を考えるが、お互い大変だと思ふのである。腰も手も足も疲れ果て、作業が終わっても数週間後には、草取りを繰り返すことになる。

「雑草の気持ちがかかるか。」と、励ましの言葉をいただき、教師力向上を目指してこつこつと生きてきた。校長職もあと一年となると、さらに、植物の草もあるが、物事や生活の中の雑草も考えられる。また、雑草魂となると目には見えないものもたくさんある。はて。

私は、様々な事案に答えを示さなくてはならない時に、一つの考えにとられず、多くの見方・考え方をもつ癖を身に付けたようである。答えの無い雑草の気持ちを考えようとするのが、古い物から新しい物や同じ事案でも対応が違うなど、様々な言動や様式の変化を想定して物事に取り組むことで、結果が伴うような気がする。初任当時、どんな大変な課題や問題事案でも、笑顔でするりと仕事をこなす校長の姿に、近づきたいものである。

恩師の一言

尾野見小(隅) 福 和人

私が教頭時代にある事で恩師に相談した時に一言、「他人と自分を比べてしまうのはしょうがない。ただ、あの人が自分より上だとか下だとか考えて、幸せを他人との比較で決めるのは、やめなさい。あなたが幸せかどうかは、

あなたの気持ち次第。「自分は幸せだ」と思える人だけが、幸せになれると思うよ。自信をもちなさい。」

あなた自身の幸せは他人が決めるものではなく、小さなことでも、「私は幸せだ」と幸せを実感できる心もちなさい。また、豊かな人間関係を育むためには、相手の美点を見つけ、相手が喜ぶ感謝を伝えることが重要だよ。相手のみならず、自分自身に対してもいいところを見つけることができる人になりなさい。「最後に、話ができ良かった」恩師の一言が今でも心の支えになっている。

専門〇〇になるな。

桜島中(市) 鎌 田 典 久

教員生活も三十年以上経過し、過去の自分を振り返ると、よく続いたものだと考える。教育学部出身ではない私は、卒業後に内定通知のあった旅行会社の一員になるか、中学校の社会科教員になるか悩んでいて、結局は第一希望ではなかった現職である。

大学四年の夏、ゼミの教授に、進路の選択決定について報告に伺った際に、「悩んだ末の結論。尊重する。」と言葉をかけていただいた。

そして、「二十一世紀は多様性の時代になる。幅広い知識と教養、そして柔軟性が必要になる。そのためにも、『専門〇〇になるな。』』と言われた。今考えると、大学四年になるまで学校という社会でしか人生を経験していない若輩者への教授からの温かいエールだったと思う。

その後、数か月して、大学を卒業する私に父親からも同じ言葉を言われた。父親は教員とは全く関係のない公務員であったが、まさか教授と同じような言葉を言うとは思わなかった。その言葉は、「現代社会に疎くなるな。常識を踏まえた人間になれ。『専門〇〇になるな。』情報誌を読め。」であった。社会へ旅立つ息子への父親のエールであったと思う。

教員としての専門性も極められず、また、社会という常識も身に付いているかどうか疑わしい自分があること自体情けないのであるが、何かしら現代社会の情報には触れるように努力はしてきたつもりである。例えば、さまざまな情報誌やテレビの情報番組には極力触れるようにしている。もちろん全てを吸収できる訳もなく、それが自分自身の多様性や柔軟性の向上につながっているかは不明であるが、少しでも幅のある人間性の向上につながっていることを願っていた。

そして、これからも教授と父親の二人のエールを忘れずに、常識人としての自分磨きをしながら残り少ない教育活動に邁進したい。

ある日の校長講話



一秒の言葉

小泉吉宏 作

「はじめまして」

この一秒ほどの短い言葉に

一生のときめきを感じることもある

「ありがとう」

この一秒ほどの短い言葉に

人の優しさを知ることがある

「がんばって」

この一秒ほどの短い言葉で

勇気がよみがえってることがある

「おめでとう」

この一秒ほどの短い言葉で

しあわせにあふれることがある

「ごめんなさい」

この一秒ほどの短い言葉に

人の弱さを見ることがある

「さようなら」

この一秒ほどの短い言葉が

一生の別れになる時がある

一秒に喜び 一秒に泣く

一生懸命 一秒

言葉は、言われてうれしい心の花束にもなるし、反対に心を傷つけるナイフにもなるんですよ。こんなすてきな言葉の詩があるので読んでみますね。

一つ上を目指して挑戦を！

伊集院中(旦) 小野 修

皆さんは新年を迎えてどのような一年の目標を立てましたか？

今日は「一つ上を目指して挑戦を！」というお話をします。少年期から青年期を迎える中学生時代は自分の可能性に向かって挑戦するには絶好のチャンスですが、人間を含む動物には心理的な縄張りがあります。そして、新しいことに挑戦することや未知の世界に踏み込むことに対して、人間は本能的に恐怖や不安を感じます。なぜなら、縄張りの外は敵だらけで生命の危険にもさらされてしまうことがあるからです。

では、不安や恐怖を乗り越えて挑戦するためには必要なことは何でしょうか。心理学の世界には、コンフォートゾーン(快適領域)という言葉があります。自分にとって居心地のよい安心できる状態やエリアのことです。このコンフォートゾーンの外側にはラーニングゾーンという学習領域があります。このゾーンは今の自分の能力よりも高い能力が求められる場面や未知の体験などに挑戦をする場面のことで、心理的にもとても不安になるゾーンです。このコンフォートゾーンからラーニングゾーンに踏み出すと、集中力や意欲や記憶力、学習能力などがアップして自己成長が引き起こされるのだそうです。

「学校のシンボル」の話

木原小・中(始伊) 田代 正 広

域の方もいました。

次に『校歌』についてです。『校歌』は学校行事の度に歌ってきたと思います。校歌の歌詞は、学校の歴史や文化など、子どもたちへの思いを綴ってあります。校歌は、学級や学校全員で一緒に歌うので、強く思いが込められます。卒業してからも、その当時の思い出も振り返ることができます。実際に、卒業生の同窓会で校歌を歌いたいということで、歌詞や伴奏の音源などの問い合わせに対応したこともありました。

この時に注意しなければならないことが一つあります。ラーニングゾーンの外側には、デンジャーゾーンという危険領域があるのです。このゾーンに入ると強いストレスホルモンが分泌され、過度の不安と恐怖から「どうせ無理だ」とか「自分にできるわけがない」という心のブレーキがかかってしまうのです。生徒の皆さん、だからといって挑戦をあきらめないでください。デンジャーゾーンだと思った時は、ずっとコンフォートゾーンに戻ればいいのです。「自分を育てるのは自分」です。世界でただ一人の私を、どんな私に仕上げるか。その責任者は、皆さん一人一人です。

「時間がないし」とか「忙しいし」とか「誰も教えてくれないし」なんていう言い訳は、自分の大切な、そして唯一の責任を放棄することになります。新年を迎え、今の自分に満足せず、新しい目標に向かって、「一つ上を目指して挑戦」できる人になってください。

「学校のシンボル」といったら何でしょう。皆さんの多くは、校門の所にある『けやき』の大木を思い浮かべるでしょう。いつも皆さんの登下校を優しく見守り、風のささやきを伝え、夏には涼しい木陰をもたらししてくれる『けやき』の大木、「本校のシンボルツリー」ですね。

その他の「学校のシンボル」といえば、『校旗』と『校歌』です。どちらも学校の特徴を「旗」と「歌」という形で表したのになっています。自分は、前任校で小学校の閉校と新しい小学校の開校準備をしました。

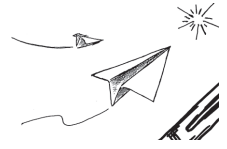
そこで『校旗』についてですが、毎日掲揚してあり、学校行事の度に目にしてきました。その校旗は学校の歴史や文化など子どもたちへの思いをデザインしてあります。

閉校式典における教育委員会への校旗の返還セレモニーを見て、「本当に母校が閉校する」という実感が湧いてきて涙が出てきた」という地

閉校式典の後に、参加者全員による校歌の合唱があり、多くの卒業生・地域の方々が涙ぐみながら歌っていました。

『けやき』『校旗』『校歌』について話しましたが、それは皆さんや卒業生、本校に関係した人を繋ぐ絆です。本校の歴史や伝統です。一緒に、目標に向かって前進していく励みです。本校の児童・生徒として、誇りをもって、『けやき』や『校旗』を見上げ、元気な声で『校歌』を合唱し、今後もどんどん成長して行ってください。

話のひろば



元校長先生から

学んだこと

中山小(市)

中村 武司

教頭としての異動が決まったことを報告するために、私はお世話になった元校長先生の自宅を訪れた。その時ご自身の校長時代の思い出話を語ってくださいました。一つだけ印象深い話があった。

仕事や勤務に関することでなかなか話が合わぬ職員(Aさん)が一人だけいたそう。学校を円滑に運営する上で課題に感じていた。ある日、別の職員からAさんの家に子猫が産まれたというのを聞き、何気なく「Aさんの猫が子猫を産んだそうですね。」と話しかけると、「そうですね。」と、とてもうれし

ような反応があり、子猫の話で盛り上がった。その後には子猫について話す機会が増え、仕事や勤務のことにも耳を傾けてくれるようになったということだった。話を伺ったときは、あまり重く受け止めていなかったのだが、すぐにこの話を思い出すことになった。

教頭として赴任して最初の出会いがうまくいかなかった職員がいた。朝の挨拶もまともに返してくれない状態であった。その職員は、バレーボール少年団の指導者でもあり、私自身学生時代バレーボールを経験していたことから、バレーボールを話題に話しかけた。それをきっかけに挨拶や日常的な会話が自然とできるようになった。また、ご自身の教育観や指導観なども語ってくれるようになった。

同じようなことが新任校長時代にもあった。異動したばかりのある職員が前任校と比べて何かと意見を私に直接言ってきた。世間話ができる関係になるため、いろいろ話題を振ったがなかなか会話が弾むまではいかなかった。数か月後ようやく自動車にこだわりのあることが分かり、その職員が乗っている自動車の話を聞く中

で、お互い笑顔で会話できるようになった。その職員はその後も私のところによくやってきたが、私の話も受け入れてくれるようになった。元校長先生の話を聞いていたからこそ、私は積極的に職員に話しかけることができた。本校には百人近い職員がいるが、できる限り多くの職員と話す機会をつくっていききたい。

郷土への思いを

育てる

牧園小(始伊)

馬庭 直樹

四月に神話の里・牧園に赴任してきて、初めての全校朝会が近づくと、今年の校長講話の話題に悩んでしまっ

た。

普段から、校長の話は、子供たちの活動や行事に対して、意味付けや価値付けであるべきだとは思っているのだが、全校朝会においては、校長の思いを直接子供たちに語り掛けることのできるチャンスだと考えていたからである。

全校朝会までの短い期間であったが、子供たちと言葉を交わす機会に、「牧園の良さ」について尋ねると、多くの子供たちが口ごもってしまった。子供たちは郷土・牧園に価値を見出していないようであった。「天孫降臨」という言葉は聞いたことがあっても、「天孫降臨」自体がどのようなものであるかを知っている子供はほとんどいない。昨年度創立百五十周年を迎えた本校だが、百五十年前に郷土で何があつて、どのようなところであつたのか、子供たちは知らないのである。

そこで、子供たちに「郷土の良さ」や「郷土のすばらしさ」に気付いてもらうため、牧園の歴史や神話について全校朝会で語ることにした。

第一回は、「牧園は和気清麻呂ゆかりの地」と題して、宇佐八幡神託事件により大隅の地に流された和気清麻呂は牧園にいたという伝説が残っていることを語った。さすがに、低学年には難しすぎたという担任からの批判もあつたが、全校朝会の直前の職員連絡会等で、次回の校長の話の概要を伝えることで、学年に応じた

補足を入れていただくように協力を依頼した。

第二回は、「百五十年前の牧園小学校」について地域に残る史跡を紹介しながら話をした。西郷さんが西南の役で戦っていた時には、すでに牧園小学校があり、村の名前を決める際には、小学校と同じ名前にすべきであるという意見から「牧園村」になったことなどを紹介した。

第三回は「ヤマトタケルと踊郷」、第四回は「天孫降臨はどうして孫なの」を計画している。少しずつではあるが、図書館に向かう子供たちが郷土の神話に目を向けたと、学校図書館司書の先生からのうれしい報告を受けた。

心のリフレッシュ

枕崎中(南)

下園 伸秀

校長として六年目、毎朝正門での生徒のあいさつに癒やされやりがいを感じている。ただ校長職には、張り詰めた緊張感もあり、ストレスを感じることも多い。そんな時は好きな事をしてリフレッシュしたいものである。

皆さんはどんな趣味をお持ちだろうか。私はたくさんさんの趣味があるが、その中でバイクツーリングとキャンプを紹介したい。原付バイクには学生時代から乗っていた。四十歳を過ぎ教頭になってから大きなバイクに乗りたくなり、中型、大型のバイク免許を取った。初めは、二百五十ccのスクーターに乗っていた。日常の移動の他に時々、県内外あちこちへバイクを走らせた。自然の家勤務になり、バイクを大型バイクに乗り換えた。同僚と二人で四国一周のツーリングに出かけたのは貴重な経験であつた。知らない土地、初めて見る風景の中を風を切つて走る爽快感はなんとも言えない。

次にキャンプであるが、初めてテントと寝袋を買つたのは、自然の家勤務が終わってからである。自然の家では子供たちに野外活動の楽しさを教えていたが、当時の私は野外活動を楽しめずにいた。しかし、自然の家から離れると自然が恋しくなった。テントや寝袋をバイクに積んで、あちこちのキャンプ場に一人で出かけた。キャンプ場はあまり人の多くない所を選んでいく。普段は、人と接する仕事をしているとキャ

キャンプ場で一人で料理したり、たき火をしたりしながら過ごす時間が本当にリラクセスできる。たき火の前でお酒を飲みながら、本をめくるのも格別である。キャンプはツーリングとともにできるので一層楽しみが増しています。

そして、今は車中泊にシフトしてきている。車でドライブし、道の駅を探して車の中に泊まる。初めて見る景色を楽しむのは、ツーリングと一緒。初めて泊まる道の駅での時間を楽しむのはキャンプと一緒にある。今年も、長崎や熊本、宮崎で車中泊を楽しんだ。今後も老後の楽しみになりそう。

校長職を楽しむには、心のリフレッシュは欠かせないのではないだろうか。



読書案内



米澤好史 著

やさしくわかる！愛着障害

理解を深め、支援の基本を押さえる

東谷山小(市) 林 耕 二

● これまで効果的だと思ってきた指導法が通用しない。

経験豊富な教師もこれまでと同じ指導法では子供の行動が改善されないと指導に困惑している。そればかりか、かえって子供の混乱を招き、逆効果ということも少なくない。

そんな時「愛着障害」について書かれた本書に出合った。「愛着障害を発達障害と誤解して、発達障害の支援をしても改善せず、徒労感だけが残ってしまう。」とあった。行動の問題であるADHD、認知の問題であるASDに対し、愛着障害は感情の問題と言われる。身体や認知面は年齢相応であるのに対し、心・感情が未発達のため、傷つきやすいその心を守るため、分厚い鎧を着て強固な壁をつくっているとある。そう考えると、気になる子供の不可解な言動も少し理解できる気がした。

本書では、チェックリストに照らして、子供たちの今を確認することができる。

① 常に多動な子供に対し、愛着に障害がある子供は決まった曜日や時間に(ムラのある)多動になる傾向がある。

● 何度注意しても全然改善されない。
● 相手が嫌な顔をしているのに、行動がエスカレートしていく。
若い教師が通る指導力不足が故の悩み、指導力を高めることで解決できるはず…と思っていたが、どうもそればかりではなさそう。

② 同じ片付けができないという状況で、行動

の仕方を支援すればできるようになる子供に
対し、愛着障害ではそもそも片付けようとす
る感情が育っていないため、感情への支援が
必要である。

③ してはいけなさと分かっているのにしてし

まう子供に対し、愛着障害ではそもそもルー
ルを守ろうという気持ちがない。

等々、職員と目の前の子供たちの日頃の様子
を振り返り、「そういえば…」と合点もいった。

生育歴や家庭環境は一人一人違い、全てを当
てはめることはできないが、少なくとも私たち
職員が子供の内面を見つめ、今子供の心の中
で起きていることを想像し、感情に寄り添った
対応を心掛けようと思う。

ほんの森出版 千八百円



■ 新渡戸稲造 著 / 岬龍一郎 訳

武士道

和泊小(大)池田裕一郎

和泊町内の小学校では、肝心(ちむぐくる)
という西郷隆盛について学ぶ時間がある。えら
ぶの人たちは、西郷さんのことを尊敬している。
それは、自分のことを忘れて、人のため、国の
ために尽くしたからだ。えらぶの人たちは、え
らぶの子供たちに、肝心を通してこれからの日
本を背負って行ってほしいという願いをもっ
ている。

さて、えらぶで唯一の書店に向いてみた。

新五千円札が発行されたこともあり、新渡戸稲
造(旧五千円札の方)著という文字が目に入っ
た。武士道というタイトルに背筋が凍とするの
を感じながら、パラパラとページをめくってい
くと、「西郷南洲翁遺訓」という文字が目にと
まった。町の公民館講座で西郷塾を受講してい
ることもあり、西郷さんのことも書かれている

ので、読んでみることにした。

侍ジャパンであるとか、わたしも担任時代に、
侍池田屋などと学級名を子供たちと付けて、学
級経営を楽しんだこともあった。侍や武士道が
私たち日本人に与える影響は、今なお力強いも
のがあるからだと思う。

校長二年目。「魅力ある学校づくり」「特色あ
る教育課程」「使命感と指導力の向上」「確かな
学力の育成」「人権教育・特別支援教育」など、
取り組まなければならない課題は多岐に渡る。
とりわけ、本年度は、「魅力ある学校づくり」
について、指定を受けて取り組んでいる。この
取組で成果を少しでも出すことが、他の課題の
解決にも繋がっていくと信じている。その研究
については、職員を信じて任せ、校長としても
リーダーシップを発揮し、授業の工夫・進化に
繋がるような方向性を提示していきたい。この
書には、西郷さんの「人を相手にせず、天を相
手にせよ。天を相手にして、己を尽くし人を咎
めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし」と、遺訓
から引用してある。

武士の教育において重んじられるのは、品格

の形成である。武士道とは、武士の守るべき掟である。それは、不言不文の語られざる掟、書かれざる掟であり、侍の心の肉ひだに刻み込まれ、強力な行動規範としての拘束力をもっている。

現代においても人の品格は、礼節・礼儀に表れる。それらは、他を思いやる心や優しさの表れであり、このような心配りは、日常生活の様々な行動に見ることが出来る。

教育活動を進めると、たくさんの方が湧いてくる。結局の所、教育とは、「人づくり」である。人をつくるために、多方面から多様なアプローチをしていくことが、私たち教師の務めである。登る山は一緒でも、登り方は様々であることを明確にして、子供たちや職員の仕事に関する裁量の幅を拡大すべきであると感じている。ゴールするまで様々なことがあると思うが、「我が誠の足らざるを尋ぬべし」という西郷さんの遺訓を胸に、子供たちにも職員にも寄り添っていききたい。武士道を通して、和魂を学ぶことができる一冊である。

■ 樋口廣太郎 著

前例がない。だからやる！

鹿児島南特支 芝原 一郎

刊行されたのは一九九六年であるが、文庫収録にあたり再編集され、私が手にしたのは二〇〇二年の初版文庫本である。二十年以上も前の書籍であるが故、すでに紹介されたことは想像に難くないが、職場を転々とする中でも常に傍らに置いてきた書籍として敢えて紹介したい。

氏がアサヒビールの社長として就任した一九八六年では、ビール業界は成熟産業化したといわれており、アサヒビールは「夕日ビール」と揶揄されるほどの業績の落ち込みを示していた。加えて激しい環境変化、長引く景気低迷等もあり、企業経営者にとっては逆境の時代として捉えられていたが、氏は「逆境の時代は、過去にとらわれず、前例のないことに挑戦できる時代」と考え、社員の意識改革に取り組んだ。また、サッポロビール、キリンビールなど、い

わゆるライバル会社に自社の欠点を聞きに行き、前例にとらわれない革新的・挑戦的な姿勢でリーダーとしての役割を果たした。その結果、『スーパードライ』でアサヒビールを業界トップにまで導いた立役者である。

官公庁等は前例がないことはやりたがらない印象が一般的で、それは学校も同様の傾向があると思える。過去の成功体験に依存して指導法改善がなかなか進まない、新しい指導法が受け入れられない、前例を踏襲してしまい業務改善が図られないなど、課題として感じている学校もあるのではないだろうか。

本書にある「前例がないことへの挑戦」からは、固定概念を打破し改革を進めるビジョンだけでなく、リーダーシップやリスクマネジメントのヒントを得ることができる。アサヒビールのエピソードに終始した感はあるが、予測不能な未来を見据えた教育活動の構築に示唆を与えてくれる一冊である。

講談社 + a 文庫 六百四十円

PHP 研究所 千六百元

朝晩の冷え込みが厳しくなる頃になると、ついつい買い揃えたくなるものがある。四ミリ角で長さが九百ミリの角材、風紙、速乾性の木工用ボンドである。これらが一つの店舗で購入できた試しはない。品選びにちよつとしたこだわりがあるからである。さて、制作開始。

買い揃えた材料で作るもの、それは「飛行機風」である。趣味というよりは、好きなものと言った方が正解である。この飛行機風との出会いは、ある社会教育施設の本棚だった。年末から年始にかけての家族を対象としたイベントを企画するためにヒントを探していた時だった。

なぜかその飛行機風のペー
ジを一気に読み終えたの
だ。

全長九百ミリ、主翼の長さ九百ミリ、尾翼の長さ四百五十ミリの立体風が風を受け、空に舞い上がるのか

試してみたくなり、制作を試みた。本に紹介されているとおりに長さを測り、角材を切断し、接合した。風紙は襖を張る要領で貼り付けた。主翼一枚、尾翼一枚、胴体二枚を仕上げ、最後に胴体に主翼と尾翼を糸で結び付ける。機体の歪みを確認して機首に風糸を結び完成した。この初号機が形になったことが後に二号機・三号機へと制作意欲を掻き立ててくれた。制作にも慣れ、機体の歪みもなくなってくると、いよいよ空へとデビューさせたくなる。尾翼側を地面に立て、走りながら糸を勢いよく引くと機体は空へと上がる。重量があるにも関わらずよく上

趣味・文芸

飛行機風

がった。この飛行機風の設計図を描いた先人は本当にすごいと思った。その次の瞬間、機体は地面に勢いよく落ちた。この飛行機風は揚げるのは簡単だが、安定して地面に降ろすのが難しいのである。油断して洗礼を浴びた。機体は傷ついたが、心が躍ったのを今でも覚えている。日本の風は素晴らしい。

風の起源は中国と言われており、紙鳶(しえん)と呼ばれていた。これは紙で作った鳶(とび)を意味する。この風には、伝説上の生物である鳳凰や竜、鳥、獣が描かれており、軍事目的で作られたものと言われている。日本には平

い。シンプルな構造をしているため、補修が容易にできるところも魅力の一つである。

三学期には、一年生が生活科の単元「冬を楽しむ」で風作りと風揚げを楽しむ時期がやってくる。ビニルとひごでできた風に子どもたちが思い思いの絵や文字を描く。一年生は、手を精一杯伸ばして校庭中を走り回る。校庭が子どもたちの歓声と、色とりどりの風でにぎやかになるだろう。一年生と一緒に飛行機風を空に揚げてみよう。一年生のきらきらとした笑顔を期待しながら冬を楽しもう。

山川小(南) 口ノ町

亨

コンデイションは、風速が秒速五メートルから七メートルぐらいである。数字では分かりにくいだが、概ね掲揚台の旗が真横にたなびく程度である。機体自体に重量があり、ある程度の風が

必要なのである。

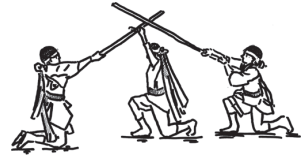
九号機の風紙に霧吹きでかけた水も乾き、紙が丁度よい塩梅で張り付いている。胴体・主翼・尾翼を糸で結び、完成させることができた。この大きな機体が舞い上がるのは本当に不思議である。先人たちの知恵と器用さには驚かされる。この素晴らしさの一部だけでも子どもたちに継承していこう。一年生の生活科の学習が始まるのが楽しみである。このわくわく感が何ものにも代え難い。

さて、十号機の角材を採寸しておこう。朝晩の冷え込みが厳しいうちに。

西郷さんの結ぶ縁と

「かんまち」の史跡

大龍小(市)
原口 雅也



一 西郷さんの教えを教育活動に

長い歴史と伝統のある大龍小学校は、昨年度、創立一四〇周年を迎えた。

「大龍小学校はどんな学校ですか。」と聞かれたら「西郷さんの教えを教育活動に生かしている学校です。」と答える。具体的には、

- 校訓が「敬天愛人」と「奮励努力」
- 西郷さんに関連した学校行事
- 総合的な学習の「西郷単元」等がある。

校訓の「敬天愛人」は西郷さんの座右の銘であり、「奮励努力」は東郷元帥の言葉である。この二つの校訓の意味を、それぞれ易しい表現で誓いの言葉にした文章を「敬愛のおしえ」と「努力のさとし」と言う。この文章を子供たちは毎日の朝の会で唱和している。

また、どの学級の前面にも西郷さんの肖像画が掲示され、校舎入口には西郷さんの大きな胸像も置かれている。

さらに、本校は地理的にも西郷さんの眠る南洲墓地に一番近い学校でもある。

二 朝陽第二小学校との姉妹校盟約

本校は、山形県鶴岡市立朝陽第二小学校と姉妹校盟約を結んでいる。

この姉妹校盟約は、今から五十六年前の昭和四十三年（一九六八年）九月二十四日（西郷さんの命日）に結ばれ、約半世紀に渡って続けられている。これも西郷さんと庄内藩のつながりがきっかけとなっている。（徳の交わり）と言う。）

特に、三年に一度行われる

「直接交流」では、お互いの子供たち数名が鶴岡市に行ったり、鹿児島市に來てもらったりしている。

また、直接の行き来だけでなく、毎年お互いの学習の成果を紹介し合ったり、特産品の交換を行ったりもしている。

お互いがお互いの校歌を歌えることも西郷さんを縁としたこの交流のよさである。

三 内城跡と大龍寺跡

大龍小学校は大龍寺跡に建てられた。そして、その大龍寺は内城跡に建てられている。

内城は、十五代島津貴久が一五五〇年（天文十九年）に建てたものである。その後、十六代義久、十八代家久と島津家三代にわたり、



朝二小が来鹿したときの交流の様子

約五十年の間、居城となっていた。平城で堀はなく、館造りであったと伝えられている。

大龍寺は、内城の跡に建てられたお寺である。島津貴久の法名「大中」と義久の号「龍伯」から一文字ずつ取って「大龍寺」と名付けられた。本校の校名の由来でもある。

本校の校庭には内城時代のものでとされる手水鉢と庭石が残っている。



敷地内にある内城時代の手水鉢

また、薩摩義士の治水工事で有名な平田鞆負の屋敷にあったと言われるソテツも本校に移植されている。

四 歴史の宝庫「かんまち」

鹿児島駅を中心とした近隣の地域を「かんまち（上町）」と呼ぶ。この「かんまち」には、縄文前期の遺跡碑を始めとし、様々な時代の歴史の名残が至るところにある。学校敷地内の史跡等もそうだが、本校の隣には「今和泉島津家屋敷跡（篤姫の生家）」や「越前（重富）島津家屋敷跡」がある。他にも五代友厚や森有礼の誕生地、多賀山公園周辺の史跡、西郷隆盛終焉の地、南洲墓地等、まさに、歴史の宝庫と言えるだろう。ぜひ一度、「かんまち」の散策をお勧めする。

Change!

新しいことに挑み
一つ一つと良さを
身に付けていくと
気づかないうちに
大きく変わっている。



鹿児島市街地と桜島

© K.P.V.B

提供 「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



一般財団法人校長会館だより

あけましておめでとうございます。本年も、どうぞよろしく願います。

なお、今後の校長会館の行事予定は次のとおりです。

- 三月 四日（火）理事会
- 三月十一日（火）評議員会

教育長異動

○新任 令和六年十二月十六日付

和泊町 村山 英哲 氏

（元知名町立田皆中学校長）

○再任 令和六年十二月二十六日付

屋久島町 石田尾 行徳 氏

○再任 令和七年一月二日付

喜界町 久保 康治 氏

〔事務局より〕

令和七年度の総会は、次のとおり行う予定です。市町村会長のほぼ全員が委員となりますので、お知りおきください。

○ 四月二十三日（水）

於…県青少年会館

出席者…役員、専門部長、常任委員、

委員、事務局

編集後記



新年あけましておめでとうございます。令和七年は、県内全域天気に恵まれ、初日の出を拝んだり初詣に出かけたりと、穏やかな幕開けだったのではないのでしょうか。新しい年が始まるに当たって、今年がどんな年になるのか気になるところです。

さて、年末・年始のテレビの特別番組で令和七年の運勢等を多く観ることにしました。私が初任の頃、先輩の先生から「教師は『五者』であれ」と教えられたことがありました。五者とは、学者・役者・医者・易者・芸者のこと。その中でも特に校長は「易者」でなければならぬと思うことです。自校の未来を見据えて、ビジョンを立てる。様々な可能性を感じて、その道に導くことの大切さを日々感じているところです。

今年度、広報常任部員として活動させていだいております。毎月、多くの先生方からお寄せいただいた原稿の校正作業を行っていただいている。先生方の豊富な経験からの教育観や教育実践等に毎回刺激を受け、多くのことを学ばせていただいております。

今年度は、「変化」と「成長」を表す年とされています。さらに、「十」と組み合わせたり、干支でいうと「乙巳（きのとみ）」となり、これは六十年に一度しか巡ってこない特別な年で、努力が実を結び、物事を安定させていく成長の年と言われています。今年も学校は、様々な課題に直面することと思いますが、蛇のように辛抱強く、粘り強く柔軟に解決していきたいものです。

最後に、校務御多用の中、玉稿をお寄せいただきました校長先生方に厚くお礼を申し上げます。今年も原稿執筆依頼等、広報部の業務への御理解、御協力、何卒よろしくお願い申し上げます。併せて皆様方の御健康を祈念申し上げます。

西村 かおり（桜丘東小学校）